■発行■
2007年3月
vol.7
ファルマバレーセンター
E-Mail mail@fuji-pvc.jp
URL www.fuji-pvc.jp

「富士山麓から世界へ ～ファルマバレーは、いま！～」

〒411-8777 静岡県駿東郡長泉町下長窪1007 TEL055-980-6333 FAX055-980-6320
県立静岡がんセンター研究所1階

大阪で初の開催―ファルマバレープロジェクト成果発表会―
関西地域クラスターとの連携探る

■先端研究からウエルネスまで幅広い分野での成果が発表された

■「患者・家族の視点」に立ったベッドサイドクラスターについて発表する山口総長

ファルマバレープロジェクトは研究開発の一層の推進とともに、ベンチャー企業の創生や地域の活性化に向けた具体的な展開が求められている。世界を視野に入れた新たな展開に向け、他地域との連携、協働の第一歩として、県は「富士山麓ファルマバレープロジェクト成果発表会」を大阪で開催した。

1月30日、ホテル日航大阪（大阪市中央区西心斎橋）で富士山麓ファルマバレープロジェクト成果発表会が開催された。関西地域の製薬企業、研究機関、大学そして産業支援機関などから約100人が参加した。県外での発表会は、昨年7月の東京に続き2回目、関西地域では初の開催となる。

最初に、静岡県健康福祉部の出野勉参事が、ファルマバレープロジェクトの目的やこれまでの成果などを紹介。今後は、新たな戦略に基づき、ベンチャー企業創出や世界を視野に入れた具体的な事業展開を図っていく、と説明した。

続いて、ファルマバレーセンターの井上謙吾所長は、アカデミアから新薬候補化合物の創出が可能であり、静岡の創薬プロジェクトが順調に進んでいることや、治験ネットワークへの製薬企業からの依頼が増えてきていることをPRした。

静岡がんセンターの山口建総長は、研究開発における基本理念やものづくりの考え方などを説明するとともに、ベッドサイド（患者、家族、医療従事者等）のニーズに応える「ひとづくり」「ものづくり」「まちづくり」を紹介した。

最後に、伊豆のかかりつけ湯協議会代表幹事の鈴木基文船原館館主が、伊豆新世紀創造祭からはじまり、かかりつけ湯に至る伊豆観光のブランド化に向けた取り組みと伊豆の魅力についてユーモアを交えながら披露した。

大阪、兵庫、京都など関西地域では全国有数のバイオクラスターの形成が進んでおり、県では、今後、世界を視野に、これらのクラスターとの連携を図っていく考えだ。

各ページの下には、SPコードが印刷されています。SPコードとは、約800文字の音声コードです。専用読み取り機械に入れると、目の不自由な方でも音声で内容を知ることができます。

■会場は発表を熱心に聞く参加者で埋め尽くされた

世界最先端のがん研究成果を発表

今年で9回目を迎える「静岡がん会議2006」が2月10日、県立静岡がんセンター研究所で開催された。今年度のテーマは「新しい薬剤の開発とバイオマーカー」。しおさいホールに集まった大学、製薬企業、一般市民など約150人は、世界各国からの一流の講師陣による最先端の抗がん剤開発やバイオマーカーの研究を熱心に視聴した。

がん克服目指し専門家が集結

開会に先立ち、挨拶に立った石川嘉延知事は、「静岡県はファルマバレープロジェクトを進めてきた。その中心的役割を担うがんセンターは、いまや患者満足度日本一と支持されるまでになっている。一方、長寿化が進む中で、がんをはじめとする病の悩みも深刻化している。静岡がん会議が人類最大のテーマともいえるがん克服の一助になればうれしい」と期待を述べた。

会議の実行委員長を務める山口建総長は、「近年がんの領域、特に抗がん剤に関しては新しい分子標的をターゲットとする薬剤の開発が進んでいる。ファルマバレープロジェクトでも、新しい抗がん剤の開発に力を入れている。本日は米・韓・日・中におけるバイオマーカーを使った新薬開発の最もホットな情報を提供したい」と語った。

静岡がん会議は、静岡がんセンターの開設準備期より回を重ね、今年で9回目。毎回、世界、特にアジアの研究者を招いた講演を行ってきた。こうしたネットワークが同センターの整備計画や、患者・家族に寄り添う医療として今に生かされている。山口総長は、今回のテーマを通じて、日本と同様、国民の死亡率ナンバーワンをがんが占める韓国、中国などアジア各国での抗がん剤開発を見据え、がん会議で培った研究者のネットワークを生かし、静岡がんセンター研究所をアジアのがん研究のハブ（拠点）として位置づけたい考えだ。

■基調講演を行った米国国立がん研究所のジョセフE.トマシェフスキ氏。講演後は会場からハイレベルな質問が相次いだ

各国の状況を次々発表

基調講演は、抗がん剤の開発を20年以上にわたり手がける米国国立がん研究所のジョセフE.トマシェフスキ氏。薬剤開発におけるバイオマーカーの意義を最先端の研究成果を交えながら発表した。続いて、日本のバイオマーカー研究の現状をファルマバレーセンターの井上謙吾所長が発表。医薬品開発の立場でバイオマーカーに期待することや、製薬企業、臨床、アカデミアとの連携の重要性や課題を提示した。昼食を挟み、韓国でがん患者の約半数を治療するソウルの代表的な5つの病院から、腫瘍内科の専門家による抗がん剤開発とバイオマーカー研究の現況が、また中国における新薬開発に関する法律や認可の流れについて発表があった。

解説 抗がん剤開発とバイオマーカー研究

バイオマーカーとは、生体内の変化を定量的あるいは定性的に計るための指標（マーカー）のこと。例えば、健康診断結果でよく見る肝機能の指標となる血清中のGPT、GOTなどの数値。血液や尿などに微量に含まれる成分であるバイオマーカーを調べることで、特定の疾病や体の状態、あるいは太りやすさ、薬への応答性の違い、病気の予後などを判定でき、新薬の評価や開発にも有用となる。

すでに、欧米の製薬企業ではバイオマーカーによって新薬開発の効率を向上させる試みが本格化している。こうした試みはがん治療の分野でも進んでおり、がん細胞に特異的な分子を標的にした治療薬を開発することで、より副作用の少ない抗がん剤の開発が期待されている。

■藁科一仁県健康福祉部長に認証登録を報告する永田社長（左から2人目）と取締役の金井直明東海大学大学院教授（3人目）。右は土居弘幸県理事

医療機器製造に弾み —フジファルマ

ファルマバレープロジェクトから新たなベンチャー企業が誕生した。富士市に本社のあるフジファルマ㈱（永田靖代表取締役）だ。医療機器の第三者認証機関として正式に発足した。

第三者認証機関は、メーカーが開発した医療機器の認証を行うことができる者として、厚生労働大臣から品目を指定して登録された機関をいう。医療機器のリスクに応じた規制を行うため、平成17年4月の改正薬事法から適用された制度だ。

医療機器は、人体に対するリスクの低い順から一般医療機器（クラスI）、管理医療機器（クラスⅡ）及び高度管理医療機器（クラスⅢ、Ⅳ）に分類される。そのうち第三者認証機関が取り扱うのは、人体へのリスクが比較的低い管理医療機器（クラスⅡ：MRI、CTから家庭で使う血圧計や注射器など）。ペースメーカーなど生命に危険を及ぼす機器は「（独）医薬品・医療機器総合機構」が承認することになっている。（右図参照）

現在、第三者認証機関は全国で14機関。フジファルマは13番目、県内では初となる。第三者認証機関の誕生で、申請から認証までの大幅な期間短縮が期待されている。

ファルマバレープロジェクトの目標の一つに、薬剤や医療・介護・福祉機器など健康関連産業の創出がある。今回、フジファルマができたことで、地域の製造業者が医療機器をより作りやすい環境が整いつつある。永田社長は「県やファルマバレーセンターの後押しで、産学官連携する中から生まれた会社。役員の半数を学識経験者が占める。ファルマバレープロジェクトが進む東部で、少しでも産業の活性化に役立ちたい」と抱負を語った。

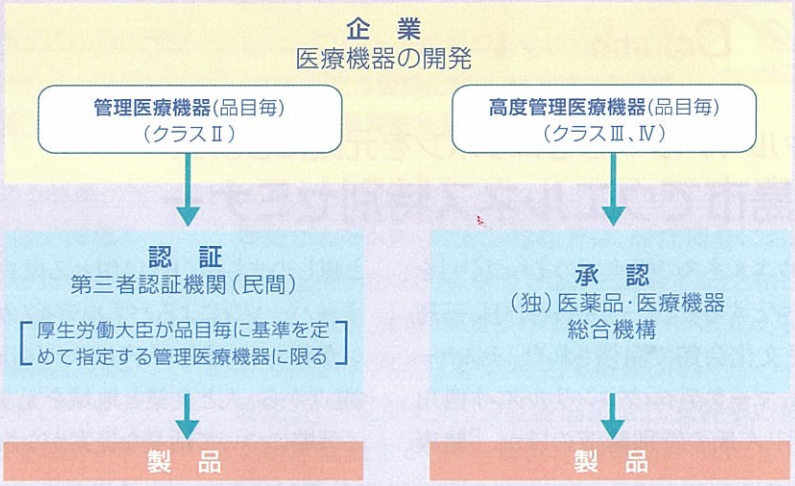
外国企業ミッションに ファルマバレープロジェクトをPR

12月6日、欧州等の医療機器関連企業5社が、静岡がんセンターを訪れた。これは、独立行政法人日本貿易振興機構（ジェトロ）が、外資系企業誘致を積極的に展開している地域に、外国企業を招へいする事業の一環。静岡県の投資環境などを直に確認してもらい、今後の投資に結びつけようというものである。

■県内企業とのビジネスマッチングの様子

一行は、がんセンター研究所を視察し、先端的ながん治療研究や医看工連携による医療機器開発について関心を示していた。また、県内企業9社を訪問し、ビジネスマッチングも行われた。

医療機器の認証等の仕組み



※クラス分類について
人体へのリスク度合によって下記のとおり分類される。
・クラスⅠ：不具合が生じた場合でも、人体へのリスクが極めて低いと考えられるもの
（例：体外診断用機器、鋼製小物、X線フィルム、歯科技工用用品）
・クラスⅡ：不具合が生じた場合でも、人体へのリスクが比較的低いと考えられるもの
（例：MRI、電子式血圧計、電子内視鏡、消化器用カテーテル、超音波診断装置）
・クラスⅢ：不具合が生じた場合、人体へのリスクが比較的高いと考えられるもの
（例：透析器、人工骨、人工呼吸器、バルーンカテーテル）
・クラスⅣ：患者への侵襲性が高く、不具合が生じた場合、生命の危険に直結する恐れがあるもの
（例：ペースメーカ、人工心臓弁、ステント）
※医療機器を市場出荷するためには、別途医療機器製造業及び医療機器製造販売業の許可が必要。

What's new　かかりつけ湯モニターツアー開催

■長楽寺で法話を楽しむ参加者

24人が参加、心も体も大満足!
かかりつけ湯と八十八カ所バスツアー

良質の温泉とおもてなしで健康増進と癒しを提供するかかりつけ湯協議会（代表幹事:船原館鈴木基文館主）は、県の伊豆ブランド創生事業の一環で2月13、14日にモニターツアーを行った。三嶋観光バス（室伏強社長）との協働で、貸切バスで伊豆八十八カ所札所巡りと、かかりつけ湯認定施設での宿泊、入浴を組み合わせた。

ツアーは1泊2日、4食付き17,000円。中高年女性を中心に県内から24人が参加した。2日間で南伊豆方面の6カ寺を訪問、納経や住職の法話を体験した。また、ボランティアガイドによる下田市内散策や下賀茂の桜見物、伊豆の幸をふんだんに使った創作弁当など、充実したメニューを満喫。2日目の船原館では、天城流湯治法インストラクターから入浴前後に効果的なストレッチ法などを学んだ。

川根本町から参加した森越さん夫妻は「お寺の住職から直接法話が聞けるめったにない機会。温泉も事前にアドバイスをもらうことで、より効果的に入浴できたと思う。訪れる先々で出会った人の話はどれも個性的で、聞いていて心が豊かになった。仕事を休んでまで参加した甲斐があった」と満足した様子。同協議会企画委員の渡邊茂樹さん（ラフォーレ修善寺）は「かかりつけ湯だけ、巡礼だけといった単体の魅力で売るのではなく、さまざまな魅力を組み合わせた商品造成が必要」と語る。次回は生誕百周年を迎えた井上靖の文学散歩とかかりつけ湯を組み合わせるツアーを予定している。

行程

【1日目】三島駅(8:30)＝湯ヶ島:嶺松院（1番札所）＝下田:玉泉寺（40番札所）＝村上合掌造民芸館（昼食）～長楽寺（42番札所）～下田市内散策～海善寺（41番札所）＝かかりつけ湯の宿:休暇村　南伊豆（泊）

【2日目】休暇村　南伊豆＝下賀茂南さくら＝奥石廊海岸＝（昼食）＝西伊豆:東福寺（83番札所）＝土肥:安楽寺（86番札所）＝かかりつけ湯の宿:船原館（入浴体験）＝（17:00頃）三島駅

■入浴前には簡単なセルフストレッチを学んだ

Column　コ/ラ/ム

ファルマバレーからニッポンを元気にしよう!
三島市でウエルネス特別セミナー

「ウエルネスの視点でのまちづくり」をテーマとするセミナーが、11月15日、三島市民文化会館で開催された。セミナーでは、マーケティングコンサルタント西川りゅうじん氏の特別講演のほか、「健康と癒しのまちづくり」に関わる県内外のキーパーソンによるパネルディスカッションが行われ、まちづくりは人づくりという観点から、人と企業と地域を元気にする戦略について活発な提案がなされた。

●**コーディネータ**　篠原光秋氏（静岡新聞社・静岡放送東部総局長）
●**パネリスト**（順不同）●西川りゅうじん氏●古川文隆氏（（財）日本ウエルネス協会専務理事）●菊地勉氏（（株）サボテンパークアンドリゾート取締役副社長）●鈴木基文氏（船原館館主/かかりつけ湯協議会代表幹事）

＊セミナーの概要は、県健康福祉部HPに掲載
http://www.pref.shizuoka.jp/kenhuku/pvc/

■「チェンジすることを恐れずチャンスに変えよう」と語る西川氏（上）。下はパネルディスカッションの様子